「香春の鏡山」

かわら　かがみやま

あずさゆみ　ひ　とよくに

梓弓　引き豊国の　鏡山　見

ひさ　こひ

ず久ならば　恋しけむかも

巻三―３１１　作者　按作村主益人（くらづくりのすぐりますひと）

（解説）こうして見なれた豊国の鏡山、この山を久しく見ないようになったら、きっと恋しく思うことだろう。

・住みなれた任地を離れるに際して詠んだ歌だといわれる。

・この歌に詠われている「豊国」は現・福岡県東部と大分県北部をいう。「鏡山」は福岡県東北部に位置する福岡県田川郡香春町にある鏡山を指す。

・鏡山のある「香春」は古代、大宰府と瀬戸内海を経て畿内とを結ぶ重要地点であった官道「田河道」の一駅として栄えていたと伝えられ、現在も香春から北九州市小倉に至る国道３２２号線と香春から瀬戸内海・周防灘沿岸に位置する行橋市方面に至る国道２０１号線が交差するなど交通の要衝となっている。

・「香春」へ訪れる際の公共交通機関としては関門海峡に面する

福岡県北九州市小倉と内陸部を南へ約７０ｋｍ離れた大分県日田市を２時間３０分程で結ぶＪＲ九州・日田彦山線が交通手段の一つである。

・ＪＲ日田彦山線の始発駅である北九州市小倉駅から５０分程で香春駅に着くが改札口を出ると正面に異様な形をした山が目に飛び込んでくる香春のシンボルで南から一の岳、二の岳、三の岳と、らくだのこぶのような三つの峰からなる「香春岳」である。

・この香春岳を福岡県八女市生まれの直木賞作家の五木寛之氏は代表作の一つ「青春の門・筑豊編（上）」で、次のように記している。

「香春岳は異様な山である。・・・・南寄りのもっとも高い峰から一の岳、二の岳、三の岳とつづく。一の岳は、その中腹から上が、みにくく切りとられて、牡蠣（かき）色の地肌が残酷な感じて露出している。・・・」とある。

・古代から昭和の初めまでは美しい三つの峰が連なる地域のシンボル的な山であったが、一の岳は石灰岩の山で昭和１０年から採掘がはじまり山肌は激しい勢いで削り取られ、標高が５００メートル近くあった山が、かっての半分近い２７０メートル程になり今の異様な形の山となった。

【左の写真は香春駅から削りとられた香春岳一の岳を望む。右奥に二の岳の頂きが見える。駅前には一の岳から削りとった石灰岩魂が置かれていた。】

・また、香春岳の三の岳（標高５１１メートル）からは奈良時代から盛んに銅が産出されたことから、香春岳周辺には渡来人が多く居住し、採銅、鋳造などにすぐれた技術を発揮し、またそれに伴う文化との密接な関係を持っていた。とされている。
なお、この地で産出され銅は奈良東大寺の大仏鋳造にも使われたと伝えられる。

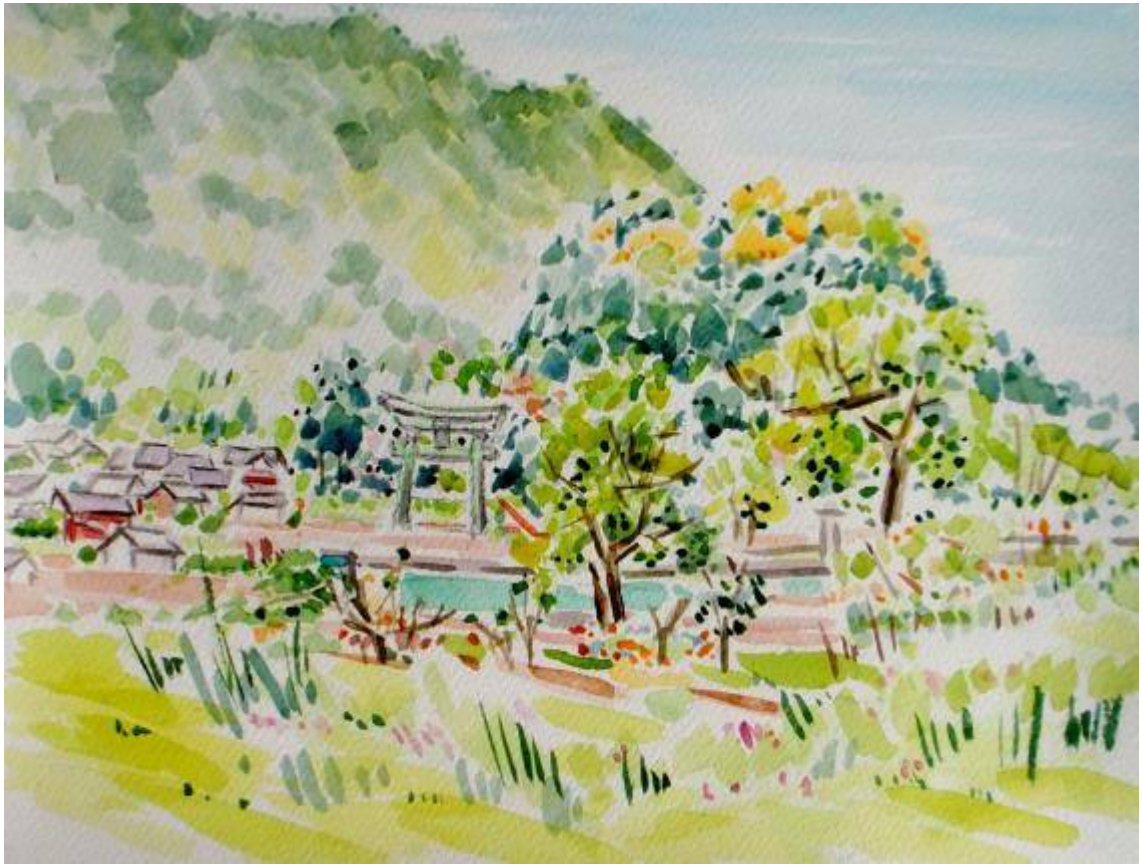
・この万葉集の歌題は「按作村主益人、豊前（とよのみちのくち）の国より京に上る時に作る歌一首」とある。

・作者・按作村主益人について前田淑氏は「筑紫万葉にみえる渡来系の人々」の中で「村主」というのは渡来系の氏族に与えられた姓（かばね）の一つである。また「按作」氏は百済などから渡来した人々といわれている。と記されているが作者・按作村主益人は京から豊前に赴いていた下級官吏か、豊前を本籍とする渡来系の人物であるか確かなことはわかっていない。

・この香春の駅から北東二キロ程の所に、福岡県田川郡香春町鏡山の集落がある。この歌に詠われている「鏡山」はこの町の西端、日田彦山線沿いの田園の中に神功皇后伝説の残る高さ５０ｍほどのこんもりと茂った山頂に鏡山大神社がある小山がその遺称地という。この鏡山の裾野に大宰府と京を結ぶ古代の官道「田河道」が通っていた。

（写生地）

日田彦山線沿いから正面に「鏡山大神社鳥居」、そのすぐ奥の森が万葉に詠われている「鏡山」、後方の山「香春岳の三の岳」と、その麓にある香春町鏡山の集落風景を描く（杏花）



（参考文献）

・新潮日本古典集成「万葉集一」・中西進著「万葉の歌」・前田淑著「筑紫万葉にみえる渡来系の人々」など